札幌まで

寺田寅彦

九月二十九日。二時半上野発。九時四十三分仙台着。一泊。翌朝七時八分青森行に乗る。

仙台以北は始めての旅だから、例により陸地測量部二十万分の一の地図を拡げて車窓から沿路の山水の詳細な見学をする。北上川（きたかみがわ）沿岸の平野には稲が一面に実って、もう刈入れるばかりになっているように見える。昨夜仙台の新聞で欠食児童何百という表題の記事を見て来たばかりの眼には、この目前見渡す限りの稲の秋は甚だそぐわない嘘のような眺めであった。豊葦原（とよあしはら）の瑞穂（みずほ）の国の瑞穂の波の中にいて、それでなかなか容易には米が食われないのである。どこかで何か

が間違っている証拠である。しかしどこで何がどう間違っているかがなかなか容易に分らない問題であろう。

北上川の蛇行水路(メアンダー)の右岸の平野に低湿の沼沢地が一面に分布しているのは不思議である。河流が完成して後に一体の地盤が沈降したのではないかと疑われる。これは地形学者の説を聞いてみなければ分らない。

平泉(ひらいずみ)の旧跡はなるほど景勝の地である。都市というものの発達するに恰好(かっこう)な条件を具えていて、しかもそれが極めて小規模な地形であるのは面白いと思われた。鎌倉やまたこの平泉などのこうした地形を見ると、昔の日本の人口の少なかった程度が推測されるような

気がするのである。昔のこれらの都市の面積と今の東京の面積との比が昔の日本の人口と今の人口との比に近いものを与えはしないかという想像が起る。

　雨上りのせいもあろうが、樹木の緑の色がいかにも落着いた、重厚な、しかも美しい暗緑色をしている。低くてなだらかな山々が広く長く根を張っている姿も、やはりいかにも落着いたのんびりした感じを与える。それでいて山水遠近の配置が決して単調でなく、大様（おうよう）で少しもせせこましくない変化を豊富に示している。

　岩手山（いわてさん）は予期以上に立派な愉快な火山である。四辺の温和な山川の中に神代の巨人のごとく伝説の英雄の

ごとく立ちはだかっている。富士が女性ならばこれは男性である。苦味もあれば渋味もある。誠に天晴（あっぱれ）な大和男児の姿である。この美しい姿を眺めながら妙な夢のような事を考えてみるのであった。

　誰かも云ったように、砂漠と苦海の外には何もない荒涼落莫（らくばく）たるユダヤの地から必然的に一神教が生れた。しかし山川の美に富む西欧諸国に入り込んだ基督（キリスト）教は、表面は一神でありながら内実はいつの間にか多神教に変化した。同時にユダヤ人の後裔（こうえい）にとっての一つの神なるエホバは自ずから姿を変えて、やがてドルになりマルクになった。その後裔の一人であったマルクスに

は、「経済」という唯一の見地よりしか人間の世界を展望することが出来なかった。それで彼の一神教的哲学は茫漠たるロシアの単調の原野の民には誠に恰好なものであり、満洲や支那の平野に極めてふさわしいものでなければならない。彼等の国には火山などは一つもないのである。これに反してエトナ、ヴェスヴィオ、ストロンボリ以下多数の火山を有する南欧イタリアの国土には当然にふさわしいシーザーが現われファシズムが生れた。今眼前にこの岩手山の実に立派な姿を眺め、その麓（ふもと）に展開する山川の実に美しい多様な変化を味わっていると、どうしても日本はやはり八百万（やおよろず）の

神々の棲処(すみか)であり、英雄の国であり、哲人の国であり、食うことと飲むことの外にまだ色々様々大事なことのある国だとしか思われないのである。こんな理窟にも何にもならない理窟を考えながら、岩手山の山霊に惜しい別れを告げたのであった。

林檎畑(りんごばたけ)の案山子(かかし)は、樹の頂上からぴょこんと空中へ今正に飛び出した所だと云ったような剽軽(ひょうきん)な恰好をしている。農婦の派手な色の頬冠りをした恰好がポーランドあたりで見かけたスラヴ女の更紗(さらさ)の頬冠(ほおかぶ)りを想い出させる。それからまた、どこの国でも婆さんは同じような婆さんである。婆さんはユニヴァーサルに国

境を超越した存在だと思う。婆さんに人種はないのである。

北へ行くほど人間の少なくなるのを感じる。たまたま停まる停車場に下りる人もなければ乗る人もない。低い綿雲が垂れ下がって乙供（おっとも）からは小雨が淋しくふり出した。野辺地（のへじ）の浜に近い灌木の茂った斜面の上空に鳶（とんび）が群れ飛んでいた。近年東京ではさっぱり鳶というものを見たことがなかったので異常に珍しくなつかしくも思われた。のみならず鳶のこのように群れているということ自身も珍しい。おそらく下には何かよほど豊富な獲物があるに相違ないが、それは何だか分ら

ない。しかし、よもや心中(しんじゅう)でもあるまい。
青森湾沿岸の家の屋根の様式は日本海海岸式で、コケラ葺(ぶき)の上に石塊を並べてあるのが多い。汽車から見た青森市の家はほとんど皆トタン葺またはコケラ葺の板壁である。いかにも軽そうで強風に吹飛ばされそうな感じがする。永久性と落着きのないのは、この辺の天然の反対である。浅虫(あさむし)温泉は車窓から見ただけで卒業することにした。
夕方連絡船に乗る。三千四百トン余のタービン船で、なかなか綺麗で堂々としている。青森市の家屋とは著しい対照である。左舷に五秒ごとに閃光を発する

平舘（たいらだて）燈台を見る。その前方遥かに七秒、十三秒くらいの間隔で光るのは竜飛岬（たっぴみさき）の燈台に相違ない。強い光束が低い雲の底面を撫（な）でてぐるりと廻るのが見える。青森湾口に近づくともう前面に函館（はこだて）の灯が雲に映っているのが見られる。マストの上には銀河がぎらぎらと凄いように冴えて、立体的な光の帯が船をはすかいに流れている。しばらく船室に引込んでいて再び甲板へ出ると、意外にもひどい雨が右舷から面（おもて）も向けられないように吹き付けている。寒暖二様の空気と海水の相戦うこの辺の海上では、天気の変化もこんなに急なものかと驚かれるのであった。

海から近づいて行く函館の山腹の街の灯は、神戸よりもむしろ香港(ホンコン)の夜を想わせる。それがそぼふる秋雨ににじんで、更にしっとりとした情趣を帯びていた。

翌朝港内をこめていた霧が上がると秋晴れの日がじりじりと照りつけた。電車で街を縦走して、とある辻から山腹の方へ広い坂道を上がって行くと、行き止まりに新築の大神宮の社(やしろ)がある。子守が遊んでいる。港内の眺めが美しい。この山の頂上へ登られたら更に一層の眺めであろうと思うが地図を見ても頂上への道がない。なるほどここは要塞であると気が付く。要塞というものは必ず景勝の地であり、また必ず地学的に

最も興味ある地点になっているのは面白い事実であろう。大神宮のすぐ下にソビエト領事館がある。これも面白い事実である。門の鉄扉（てっぴ）の外側に子守が二、三人立って門内の露人の幼児と何か言葉のやりとりをしていると、玄関から逞（たくま）しいロシア婦人が出て来て、逞しいむき出しの腕でその幼児を軽々と引っかかえて引込んで行った。ソビエトの幼児が函館の町っ児の感化に染まることを恐れるのであろう。少し下りた処の洗濯屋の看板を見ると何某プラチェシナヤと露文字で書いてある。領事館御用の洗濯屋さんだからかと思ったが、電車通りを歩いていると、露文字の看板は外にも二つ

見付かった。昔長崎を見物した時に見た露文の看板の記憶が甦って来るのを感じた。

とある町角で妙な現象を見た。それは質屋で質流れの衣類の競売をしている光景らしく判断された。みんな慾の深そうな顔をした婆さんや爺さんが血眼（ちまなこ）になって古着の山から目ぼしいのを握（つか）み出しては蚤取眼（のみとりまなこ）で検査している。気に入ったのはまるでしがみついたように小脇に抱いて誰かに掠奪されるのを恐れているようである。これも地獄変相絵巻の一場面である。それと没交渉に秋晴の太陽はほがらかに店先の街路に照り付けていた。この年になって、こんな処へ来て、こん

な光景を初めて目撃しようとは夢にも想わないことであった。旅はすべきものである。

五稜郭（ごりょうかく）行というバスを見かけて乗る。何某講と染め抜いた揃いの手拭を冠った、盛装に草鞋（わらじ）ばきという珍しい出で立ちの婦人の賑やかに陽気な一群と同乗した。公園の入口にはダリアが美しく咲いて森閑とした園内を園丁が掃除していた。子供の時分によく熱病をわずらって、その度に函館産の氷で頭を冷やしたことであったが、あの時のあの氷が、ここのこの泥水の壕（ほり）の中から切り出されて、そうして何百里の海を越えて遠く南海の浜まで送られたものであったのかと思うと、

この方が中学校の歴史で教わった五稜郭の戦いに関する感慨よりも更に深くエゴイストの心に触れるものがある。これは我が幼き日における深く限りなき父母の慈愛の想い出につながるからである。帰路のバスを待っていると葬礼の行列が通る。男は編笠を冠り白木綿の羽織のようなものを着ている。女は白頭巾(ずきん)に白の上(うわ)っ被(ぱ)りという姿である。遺骨の箱は小さな輿(こし)にのせて二人でさげて行くのである。近頃の東京の葬礼自動車ほど悪趣味なものも少ないと思う。そうして、葬儀場は時として高官の人が盛装の胸を反らす晴れの舞台となり、あるいは淑女の虚栄の暗闘のアレナとなる。

今北海の町に来て計らずこのつつましやかな葬礼を見て、人世の夕暮れにふさわしい昔ながらの行事のさびしおりを味わうことが出来たような気がした。

○時半の急行で札幌に向かう。北緯四十一度を越えても稲田の黄熟しているのに驚く。大沼公園はなるほど日本ばなれのした景色である。鉄骨ペンキ塗りの展望塔がすっかり板に付いて見える。黄櫨（はぜ）や山葡萄（やまぶどう）が紅葉しており、池には白い睡蓮（すいれん）が咲いている。駒ケ岳は先年の噴火の時に浴びた灰と軽石で新しく化粧されて、触（さわ）ったらまだ熱そうに見える。首のない大きなライオンが北向きに坐っているような姿をしている。肌の色

もそんな色である。しかし北側へ廻って見ると立派に対称的な火山の形を見せている。これも世界に誇るべき名山だと思う。

長万部（おしやまんべ）から噴火湾の海岸を離れて内地へ這入る。人間の少ないのに驚く。ちゃんとした道路があるが通っている人影が見えない。畑に働いている人もめったには見付からない。勿論、熊にも逢わなかった。

後方羊蹄山（しりべしさん）は綺麗な雲帽を冠っていた。十分後には帽が三重のスカーフ雲の笠になっていた。

倶知安（くっちやん）の辺まで来るとまた稲田がある。どこまで行っても稲田は追っかけて来るのである。それでいて

楽には米が食えないのが今の日本の国である。

札幌で五晩泊った。植物園や円山（まるやま）公園や大学構内は美しい。楡（エルム）やいろいろの槲（かしわ）やいたやなどの大木は内地で見たことのないものである。芝生の緑が柔らかで鮮やかで摘（つ）めば汁の実になりそうである。鮭が林間の小河に上って来たり、そこへ熊が水を飲みに来ていた頃を想像するのは愉快である。北海道では、今でもまだ人間と動植物が生存競争をやっていて、勝負がまだ付いていないという事は札幌市内の外郭を廻っても分る。天孫民族が渡って来た頃の本土のさま、また朝鮮の一民族が移って来た頃の武蔵野のさまを想像する参

考になりそうである。

札幌の普通の住家は室内は綺麗でも外観が身萎（みすぼ）らしい。土ほこりを浴びた板壁の板がひどく狂って反りかえっているのが多い。

有名な狸小路では到る処投売りの立札が立っていた。三越支店の食堂は満員であった。

月寒（つきさっぷ）の牧場へ行ったら、羊がみんな此方（こっち）を向いて珍しそうにまじまじと人の顔を見た。羊は朝から晩まで草を食うことより外に用がないように見える。草はいくら食ってもとても食い切れそうもないほど青々と繁茂しているのである。食うことだけの世界では羊は

幸福な存在である。

六日の朝札幌を立った。倶知安で買った弁当の副食物が、物理的には色々ちがった物質を使ってあるがどれにも味というものが欠けていた。この線路は一体に弁当がよくないので有名だという話である。この辺から汽車の音がサッポロクッチャンというように聞え出して、いつまでもそう聞えるのであった。

帰路の駒ヶ岳には虹が山腹にかかって焼土を五彩にいろどっていた。函館の連絡船待合所に憐れな妙齢の狂女が居て、はじめはボーイに白葡萄酒を命じたりしていたが、だんだんに暴れ出して窓枠の盆栽の蘭の葉

を引っぱったりして附添いの親爺（おやじ）を困らせた。それからしゃがれた声で早口に罵（ののし）りはじめ、同室の婦人を指（ゆびさ）しては激烈に挑戦した。何を云っているかは聞取れない。巡査と駅員に守られて一旦乗船したが出船間際に連れ下ろされて行った。ついさっき暴れていたとは別人のようにすごすごと下りて行った後姿が淋しかった。

札幌から大勢の警官に見送られて二十人余り背広服の壮漢が同乗したのが、船でもやはり一緒になった。途中の駅でもまた函館の波止場でも到る処で見送りが盛んであった。「頑張れよ」「御大事に」「しっかり頼む

よ」口々にこうした激励の言葉を投げた。船と埠頭の間に渡した色テープの橋の両側で勇ましい軍歌が起った、人々の顔がみんな酔ったように赤く見えた。誰も彼も意志の強そうな顔ばかりである。世の中にこわいものもなければ心配なことも何もないような人ばかりである。これらの勇士達はこれからどこの国のどこの道の果てまで行くのであろうか。おそらくどこへ行っても、行く先々に勇敢な彼等のための天地が開けて行きそうな気がする。しかし自分はと云うとこの広い世界の片隅に住み古した小さな雀の巣のような我家へ帰って行くより外はないのである。小雨の降る薄暮の

街に灯がともり始め、白い水面を一群のかもめが巴（ともえ）を描いて飛び交わしている。船は大きなカーヴを描いて出て行くので色さまざまの灯をちりばめた山腹の街の眺めがだんだんに変りながら遠くなって行く。天の一方には弦月（げんげつ）が雲間から寒い光を投げて直下の海面に一抹の真珠光を漾（ただよ）わしていた。

　青森から乗った寝台車の明け方近い夢に、地下室のような処でひどい地震を感じた。急いで階段を駈け上がろうとすると、そこには子供を連れた婦人が立ちふさがっていて上がれない。やっと外へ出て見るとそこは上野公園のような処で、自動車やボーイスカウツが

群集している。敵の飛行機から毒瓦斯（ガス）の襲撃を受けたときの防禦演習をしているのだという。サイレンが鳴ると思ったら眼が覚めた。汽車はもう仙台へ着いていた。

　帰宅してみると猫が片頬に饅頭大な腫物をこしらえてすこぶる滑稽な顔をして出迎えた。夏中ぽつりぽつり咲いていたカンナが、今頃になって一時に満開の壮観を呈している。何とか云う名の洋紅色大輪のカンナも美しいが、しかし札幌円山公園の奥の草花園で見た鎗鶏頭（やりげいとう）の鮮紅色には及ばない。彼地（かのち）の花の色は降霜に近づくほど次第に冴えて美しくなるそうである。そう

して美しさの頂点に達したときに一度に霜に殺されるそうである。血の色には汚(けが)れがあり、焔の色には苦熱があり、ルビーの色は硬くて脆(もろ)い。血の汚れを去り、焔の熱を奪い、ルビーを霊泉の水に溶かしでもしたら彼の円山の緋鶏頭(ひげいとう)の色に似た色になるであろうか。

定山渓(じょうざんけい)も登別(のぼりべつ)もどこも見ず、アイヌにも熊にも逢わないで帰って来た。函館から札幌までは赤鱏(あかえい)の尻尾(しっぽ)の部分に過ぎないが、これだけ行ったので北海道の本当の大きさがいくらか正しく頭の中で現実化されたように思う。この広大な土地に住む全体の人口は小東京市民のそれより少し多いくらいだそうである。どうも

合点の行かないことだと思う。

北海道の熊は古い古い昔に宗谷(そうや)海峡を渡って来たであろうと思われるが、どうして渡ったか、これも不思議である。大昔には陸地が続いていたのか、それとも氷がつながっていたのか誰に聞いてみても分らない。とにかく津軽海峡は渡れなかったものと見える。熊が函館まで南下して来て対岸の山々を眺めて、さてあきらめて引き返して行ったことを想像するのは愉快である。

寒い覚悟で行った札幌は暖かすぎて、下手なあぶなっかしい講演をやっていると額に汗ばんだ。東京へ

帰ってみると却って朝晩はうすら寒いくらいである。そうして熊の出ない東京には熊より恐ろしいギャングが現われて銀行を襲ったという記事で新聞が賑わった。色々のイズムはどんな大洋を越えてでも自由に渡って来るのである。

市が拡張されて東京は再び三百年前の姿に後戻りをした。東京市何区何町の真中に尾花（おばな）が戦（そよ）ぎ百舌（もず）が鳴き、狐や狸が散歩する事になったのは愉快である。これで札幌の町の十何条二十何丁の長閑（のどか）さを羨まなくてもすむことになったわけである。

（昭和七年十一月『鉄塔』）

底本：「寺田寅彦全集　第四巻」岩波書店
　　１９９７（平成９）年3月5日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana ohbe
校正：浅原庸子
２００５年6月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。